

## 7月26日の

『環奈さんへ 花火を見にいきましょう』

クラスで一度も話したことの無い相手から、突然そんなLINEがきた。

篠宮マホ。下の漢字はわかんない。窓際の席、後ろから2、3番目だったはず。シヨートのあたしとは対照的な、魔女みたいに伸びた黒髪の影響が強いんだけど、不思議とヤボったくない子。クラスの中心グループにも、大人しいグループにも入ってない。

あたしが篠宮について知ってることは、それで全部だ。

にしても、なんだこれ。たいして親しくもないあたしに、なんでいきなり花火の誘い？いつ？ どのの？ そもそも「環奈さんへ」ってなんで？ 手紙かなんか？

頭の中で散らかったハテナの中から、ひとまず一番気になったことを文字にする。

『あたしのLINE、誰に聞いたの』

送信直後に既読がついた。なんか気まずい。

『丸岡さん』

あー、マルならやりかねん。「友達の輪を広げることが生きがいなの！」とか言って、クラスどころか親戚一同にあたしのLINEを教えてもおかしくない。悪い子じゃないんだけどさ。返事を保留にして、扇風機の風圧にも負けそうなくらいだらけた身体をベッドから起こす。ついさつき麦茶に入れた氷は、とっくに溶けてなくなっていた。

高校に入学してからもうすぐ4ヶ月。私の記憶がまともなら、篠宮とは一度も口をきいたことがない。別に避けてるとかじゃなく、特に関わる必要もないから。

だからきつと、この誘いを断ったら3年間他人で終わる。それはなんだか、すごくもったいないことなんじゃないかって、ふと思ってしまうた。

『いっつー』

『今日』

今日？ 平日だけど、どっかでやってるのかな。

『まじのー』

『新宿からそう遠くない場所』

「どこだよ。つか返事早っ」

口から漏れた本音を、そのまま文字にしそうになった。

あたしはよくLINEが素っ気ないって言われるけど、篠宮に比べればマシだなと思った。スタンプや顔文字はおろか、ハテナとビックリの記号すら添えられる気配がない。これが現役女子高生のLINEです、なんて誰にも信じてもらえなさうだけど、ちょっとだけ篠宮に親近感が湧いた。あと、好奇心とか興味もね。

『いいよ。どこ待ち合わせ？』

どうして篠宮と花火に行ったの？ って学校の誰かに聞かれたら、なんて答えよう。夏休みに入っですぐに染めた髪を誰かに見せたかったから。開けたてのピアスを自慢したかったから。なんの予定もない夏休みに、とにかく変化が欲しかったから。なんとなく、気が向いたから。

『新宿駅の南口、6時半』

分かった、と返してから、今みたいな時にこそスタンプを使うんだろうなと思った。去年の誕生日にお姉ちゃんがプレゼントしてくれた、あんまり可愛くない猫のスタンプ。

せっかくだから、うんうんとうなずいてる黒猫のやつを送ってみる。

既読はついた。けどそれっきりだった。このやろう。

梅雨明けの空は不安定で、どんよりした雲から逃げるようにみんな早足で歩いている。

新宿駅の南口、6時半の5分前。平日だからスーツが多いけど、夏休みだから制服は少ない。

あたしは最近借りたロックバンドの曲とか聴きながら、待ってないふりをして篠宮を待つてる。にしても、天気大丈夫かな。花火って雨降ったら中止だよな。

「お待ちせ」

3曲目の間奏中にそう聞こえて、イヤホンを外しながら振り向いた。

印象通りの長い黒髪が立っていた。この季節だと暑苦しくなりそうなもんだけど、篠宮のそれは涼しげに流れている。というか、それはいいんだけど。

「なんで制服？」

「これ？ 部活だったから」

何部って聞こうとしたけどやめた。篠宮のことを知りたがってると思われるのは癪だから。なんて、子供っぽい理由かな。

「で、どこ行くの」

「とりあえず、夕飯を食べてもいいかしら」

こくりとうなずいてから、歩き出した篠宮についていく。あたしは家で軽く食べてきたけど、花火をやるなら出店があると見越して、本当に軽めにしてきた。いか焼きわたがしりんご飴。

「そこで買ってくるわね」

どっかの店に入るでもなく、篠宮はコンビニを指さした。自動ドアを通り抜け、迷いなくおにぎり一個とお茶を手に戻ってきて、クーラーのきいた店内で涼む間もなく会計が終わった。

コンビニの屋根の下に並んで、おにぎりの包装を丁寧に剥がす仕草を横目に見る。

「それ夕飯？ 足りるの？」

「足りなかったら、あとで買えばいいから」

もしかして、篠宮も出店の食べ物に期待してるのかな。

「新宿からそう遠くない場所って言うってたけど、結局どこなの？」

「そうね、ここから歩いて30分……とちよっとかしら」

何をもったいぶってるのか、なかなか場所を教えてくれないのが軽くイラつく。それならそれで、あたしも別に気にしてないしって態度を貫くだけだけ。

新宿御苑から響くセミの鳴き声を聞きながら、篠宮の夕食をじっと見守る。こうしてみると、まつ毛が長くてなかなか美人だ。鼻筋もスツとして、誰かが綺麗に線を引いたみたい。

最後の一口を食べ終えた篠宮は、指先についた一粒のお米を唇ですくいとった。その仕草、なんかエロくない？ とか思いつつ、ずっと気になってたことを尋ねてみる。

「ねえ、なんであたしを誘ったの？」

「……嫌だった？」

困ったような顔をされて、そんなつもりじゃないよと手を振った。

「そうじゃなくてさ、あたしらって学校で喋ったことないじゃん」

「うん……だからなの」

伏し目がちになった篠宮が、お茶を握りしめる。

「環奈さんと、仲良くなりたいと思ったの」

目を見てその言葉を言われていたら、あたしはきつと顔を赤く染められていた。中3の頃、名前も知らない後輩の男子に告白されたときよりずっと、胸がきゆうつとなった。

そんな恥ずかしいこと、ストレートに言えちゃうんだ。篠宮って、すごいかも。

「髪、染めちゃったの？」

「え？ ああ……」

これを誰かに見せたかったはずなのに、篠宮に言われるまで忘れてた。

「いいでしょ、キレイに染まってると思わない？」

「私、環奈さんには黒い髪が似合うと思うのだけれど」

「え」

染めたばっかの髪を否定された気がして、露骨に顔がゆがんでしまった。

「黒？ なんだ？」

「なんでって……感覚的な好みに理由を求められても困るわ」

黒は正直、あんまり好みじゃない。なんとなくだけど、色の重みに自分自身が耐えられなくなる。なにより、環奈って名前だけで千年に一度のなんとやらと比べられたりするから、黒髪で清纯派スタイルなんて絶対無理。

「篠宮さんが黒好きってだけじゃなくて？」

自分でも予感はしていたけど、口に出して呼ぶときはさん付けになった。今のあたしには、そのくらいの距離感。

「好き、ってわけじゃないけど……でも、黒という色に他の色が重なっていくのは好き」

「ふーん……」

よく分かんないけど、なんとなく篠宮は美術部なのかもしれないと思った。長い髪を縛って、無地のエプロンなんかを着たりして、真っ黒なキャンパスを前にした篠宮が、多彩な絵の具を操る姿を想像する。筆の先から飛び散った赤や黄色や紫が、一面の黒を染め上げていく光景。それはまるで、夜空に打ち上がるカラフルな――

「花火だ」

あたしがそう口走ると、篠宮は今日初めて笑った。悔しいけど、その笑顔は可愛いと美人が同時に成り立っていて、女のあたしでもドキッとさせられそうになった。

新宿御苑の外周に沿って歩いて、千駄ヶ谷の方に抜けた。じんめりとした夜の空気が肌にまとわりついて、首から足の先までベタベタする。

駅前にある大きな体育館の敷地を通り過ぎるのかと思ったら、そこで篠宮の足が止まった。

「ここからなら、見えるわ」

「え、ここなの？」

勝手に見晴らしの良い場所を想像してたから、拍子抜けした。視界が開けてこそいるけど、周りには他に誰もいないし、出店のでの字も見当たらない。

「てか、何時から？」

「それは……はつきりとは言えないけど、もう少しだと思う」

空模様と同じくらい曖昧な返事で、さすがにムツとしてしまう。新宿駅の南口に6時半、以外の情報がなにもかも不透明で、受け身にならざるを得ないこの状況が我慢ならない。

篠宮がおもむろにスマホを見て、整ったその顔をしかめた。

「……予想より時間がかかっちゃうかも」

困ったようにそう言われたけど、あたしは聞こえないフリをした。理由を聞いたって、どうせはぐらかされるだけだし。

「待ってる間、花火でもする？」

見る、じゃなくて、する？

そろそろ、あたしの導火線にも火が着きそうなんですけど。

駅前のコンビニで買った花火は、数分と持たずに燃えカスと化した。100均で買ったバケツは濁った水で満たされていて、あたしの心情をよく表してくれている。

当然、打ち上がる方の花火が始まる気配はない。

「まさかとは思うけど、花火ってこれのことじゃないよね」

「違うわ」

いら立ちが分かりやすく声に出るあたしと違って、篠宮の返事は淡々としている。

「ならいつ始まんの？ もう8時過ぎてんだよ？」

「大丈夫、そろそろだから」

「大丈夫って、さつきからそればつかじゃんか！」

あたしじゃなくスマホをじっと見つめる篠宮の前で、バケツを思いきり蹴飛ばしてやろうか。ずっと焦らされて、馬鹿にされているような気さえして、もう我慢の限界だ。

「ねえー！」

あたしが怒鳴っても篠宮は動じなかった。ただじっと、曇った夜空を信じるように見つめてる。詰め寄ってその目をにらんだ瞬間、黒い瞳に色とりどりの輪が映り込んだ。

大きな破裂音に身体が揺さぶられた。振り向けば、7月の夜空に火花が舞い上がっていた。緑か黄色、青か紫、ピンクかオレンジ。境界のぼやけた色をした火花が放射線状に散っては、ぱらぱらと音を立てて消えていく。遠くから響く拍手と歓声。絶え間なく続く打ち上げ火花。それを今、篠宮と二人で見上げてる。

夏だ。

「よかった……中止とかじゃなくって」

「これ、どっから上がってるの……？」

「今の時期ね、神宮球場で野球の試合がある日は、こうして火花が上がるの」

「知ってたの？」

「私の家、ここからすぐだから。夏になるといつも見てたわ」

「なら、言ってくればよかったのに。怒鳴っちゃったじゃん」

「びっくりさせたいと思ってたから……ごめんなさい」

質問の答えが全部はつきりしなかったのは、篠宮なりに考えあつてのことだったんだ。そうと分かったとたん、何にイライラしてたのかも忘れてしまった。

待望の火花はあつという間に終わった。時間にすればほんの1分足らずで、曇った夜空には煙と一緒に火薬の匂いもくもくと漂ってる。

「篠宮って、変わってるね」

「そう？」

「そうだよ。火花って言ったら普通、もっと大きい想像するじゃん」

「3尺玉とか？」

「そっちの大きさじゃなくて。こんな変わった場所で火花なんて意外すぎ」

でも、あたしは好きだよ。

そう伝えようとしたけどやめた。篠宮に気を許したと思われるのは、照れくさいから。

「あれって、試合が終わったらやるの？」

「ううん、試合の途中。けど今日は、予想より時間がかかってしまったの」

篠宮が見ているスマホの画面をのぞき込む。横長のスコアボードに数字が書いてあった。

「後攻のチームが今、10-0で負けてるみたい」

「ボロ負けじゃん。それでも花火やるんだ」

「点差は関係なく、5回が終わったらやる決まりだから」

「それもそうか。負けてるからやらないって、大の大人が拗ねてるみたいで格好悪いもんね。」

「にしても、10点って相当だね。だからさつきから、ユニフォーム着てる人が帰ってるんだ」

「もったいないわよね。まだ負けたと決まったわけじゃないのに」

「いや、さすがに無理でしょ」

「そうかしら。どんな状況だって、最後まで諦めなければなにかが起るかもしれないわ」

そのチームのファンってわけでもなさそうなのに、篠宮の言葉がやけに耳に残った。

「なにかって？」

「サヨナラホームラン？ で逆転勝利とか」

「ないない！」

うちわで扇ぐように手を振って、篠宮の意見を全否定する。

篠宮はきつと、野球のことを全然知らないんだ。あたしもルールはよく知らないけど、1点の価値はなんとなく分かる。サッカーほど重くはないけど、バスケみたいにスパスパ入ったりもしない。だから野球にとつての10点差は、筆記用具なしで臨む期末テストくらい絶望的だ。

「それじゃあ……もし、負けてる方のチームが今から追いついたらどうする？」

そんなことは絶対に取り得ない。あたしは鼻で笑いながら、思いついたままを口にする。

「明日にでもこの髪染め直してくるよ」

「本当？ じゃあ、逆転して勝ったら？」

「そしたら、3年間ずっと黒髪にしてあげる。篠宮と同じくらいの真っ黒に」

「その言葉、約束だからね」

そしてあたしは高校生活の3年間、篠宮真帆とお揃いの真っ黒髪で過ごすことになった。